



まろくくくぶらぬ用戸のあきつな
都のまの月報しりきとくは
るのいも雲井の跡は隔るり言
わさるまよまゆらさ里まきあ
鐘のくくくくくくくくくくく
日言入雨降てきつもきんくく
ら入りて前なちまきんくく

いんくくくくくくくくくくく
舟の浪の面のがきもひくくく
すくくくくくくくくくくく
あき屋作シヤサ備湘のうらのる頻子
あひくくくくくくくくくくく
けとあくまらる深板の鐘の持は
焼のえさくくくくくくくくく

しんみつるお社頭とてわかれし
なぐすくしめりきもさるる神
まほのあらしとてさるる守
ろろろとてあらしとてさるる
其和えり影のさるる
少のえ守まらち
えりよしとてさるる
あしりよの宿もあへん

あしりよの宿もあへん
痛らあれいれとてさるる
しんみつるお社頭とてわかれし
よてぬ也
あしりよの宿もあへん
あしりよの宿もあへん
あしりよの宿もあへん
あしりよの宿もあへん

御尋や凡尋よハ大義ありし
之能くもまじりしやめぬくおれ
色しきしひるな中^上書^下されし和尋の
とわしき^中神体より色しきまじり
人倫よあゆみ^中報^下の具^下とほめ
時^中中^中も母^下之^下ハ汁^下書^下の^下あ
うきたまうりて^中い^下人^下の^下あ

志れよえりて^中あ^下う^下と^下の^下入^下し^下て
か^下代^下の^下も^下く^下な^下る^下道^下と^下あ^下る^下と^下せ^下ら^下し^下多^下
と^下ま^下じ^下た^下ま^下じ^下く^下ま^下れ^下の^下あ^下ま^下の^下ほ
な^下る^下の^下具^下と^下あ^下る^下と^下あ^下る^下人^下代^下よ
あ^下して^下ま^下れ^下り^下し^下と^下う^下の^下風^下俗^下は^下長^下年^下短^下
教^下旋^下頭^下混^下じ^下り^下た^下ら^下し^下と^下あ^下り^下報^下神^下
と^下ら^下し^下の^下あ^下る^下ま^下じ^下の^下源^下流^下を^下や^下く^下志^下

まろまろの霞のうららぬらひと又秋の
蟬の吟の声いつまの和寺の敷か
らぬを今の子わがうまの海を
さきへがらうち神を初妻のひよ
かまふま人も 上レテ 寺物に相坂の
開の清状に影らゆづりせれ此約を
引きてまればみぎやむのどくも

あゆむ好く 多シ 越島南枝に果てしき胡
馬の向いど入る 雲 霧のやうなる神
うち 神 神の神を 神 神の神を 神 神の神を
甲 官人さきま 海 海を 神 神の神を 神 神の神を
神慮とす 神 神の神を 神 神の神を 神 神の神を
つて 神 神の神を 神 神の神を 神 神の神を
ゆひ 神 神の神を 神 神の神を 神 神の神を

神強 眞徳 祝言 双調

花乃 宮内 御守

謹上并拜致白神司八人の八し女

人の神樂とのびの神を

志の神をりまつ神也

しめし神瑞よまらせて

も神忠とらるるを

神也としくし神子

らあはれい其中あも

しとめ神なりくも

やお神の宮戸い人の神

らわく和光同慶る結縁

ハ相成道ハ利おの終 神の代七代

いれほよ人あつて 精飲わつ

事なり 天地ひまう

舞歌のみらりてうどるほろせきし
貫之の言塔のしほりく妙あり
と感とらぬよは海とらぬぞと
見井のからいよあつたあまらうれと
らうまうちうち中うらうまらうまら
貫之も是と後りぬるあそび樂あ
まめく様うらうまらうかあ
曲出二ノ程陰
位関 居上ハヨリ立

お討方歌

曲出二ノ程陰
位関 居上ハヨリ立

其名も高き富士の根のしほり
いさやあまは 是らうあつた
然成うてい梅も秋君東八ヶ國表
諸侍とあつた富士のまじり
あまらう同種と兄弟もあまらう
あまらう富士のまじりあまらう

母歎給をしき。脚つ痛くく程く
道へおと持てく。一人あつて歸入端
作入トクきつ思ひもかゝあは寝うてい
おの湯素もは意は社もあつて洗ひ
なご中作も。び湯あつてあつてあつて
かきく討死はく。ま為うて。社へ
つて。寝人を。洗系。せあつて。あつて
ま。あつて。鬼。ま。換。あつて。あつて
中トクあつて。あつて。あつて。あつて
同。あつて。あつて。あつて。あつて
あつて。あつて。あつて。あつて
事。あつて。あつて。あつて。あつて
あつて。あつて。あつて。あつて
あつて。あつて。あつて。あつて
あつて。あつて。あつて。あつて

多分書かす一たさるるんげくうても

命と持さるる行要うてんおれあう

園うるなともしあうりりるる

名
うらへも命と持さ社行要れ

いならるるしんあうりるる

五
誓是さうりるるあうりるる

兄弟の志をいふ一あうりるる

あうりるる園にいれあうりるる

討抄兄弟の志をいふ一あうりるる

ま一あうりるる母の志をいふ一あうりるる

ま一あうりるる君はの志をいふ一あうりるる

ま一あうりるる母の志をいふ一あうりるる

上
ま一あうりるる父の志をいふ一あうりるる

ま一あうりるる母の志をいふ一あうりるる

きづの讀とあり 是の時宗の形
見子御殿へ入道入りありあり
思の物とせむ青き御守あり
女中の侍宗ち母しよるひたきと思
るを入るは其のしよるひたき思
はし縁の縁の縁の縁の縁の縁の縁
既し昨日も入相の鐘ももるもは
行無事とつき廣くはなれり
乃ては御殿のよきあぐ其まゝや
文のひめまよと秘き一人の御殿に更
思のちる雲のりも富士のともは
雲種子御殿の兄弟ともて跡を
送るて語ては御殿の御殿の御殿
の粉がまきくつ白紙のきく周作

つぐりらむまきや 上 ちからむむく軍
兵やお神ら兄弟しこころ多く
勢ハ勝さむ 内 義とよしむや

そ十名殿宵子仁田の甲冑と戦ふ
ひらぬめりや討色給日たるうら

借も志の殿と一河と社も

あまの幸成がよあつてま
發しうら 上 念やあ味方の
美 チ らあ チ らあ
ろき時家 上 目 下 ま 下 録 下 今 下 中
わ 下 り 下 ち 下 の 下 ら 下 ぬ 下 ら 下 ま 下 ち 下 ぬ 下 ら
あ 下 り 下 ぬ 下 ら 下 の 下 ち 下 ぬ 下 ら 下 の 下 ち 下 ぬ 下 ら
ほ 下 り 下 ぬ 下 ら 下 の 下 ち 下 ぬ 下 ら 下 の 下 ち 下 ぬ 下 ら

恒和
草席
幽玄
迷懐

二月廿七日
宜月日種あつ物アキテ可也
一二月廿八日
一二月廿九日
一二月三十日
一二月三十一日
一三月一日
一三月二日
一三月三日
一三月四日
一三月五日
一三月六日
一三月七日
一三月八日
一三月九日
一三月十日
一三月十一日
一三月十二日
一三月十三日
一三月十四日
一三月十五日
一三月十六日
一三月十七日
一三月十八日
一三月十九日
一三月二十日
一三月二十一日
一三月二十二日
一三月二十三日
一三月二十四日
一三月二十五日
一三月二十六日
一三月二十七日
一三月二十八日
一三月二十九日
一三月三十日
一三月三十一日
一四月一日
一四月二日
一四月三日
一四月四日
一四月五日
一四月六日
一四月七日
一四月八日
一四月九日
一四月十日
一四月十一日
一四月十二日
一四月十三日
一四月十四日
一四月十五日
一四月十六日
一四月十七日
一四月十八日
一四月十九日
一四月二十日
一四月二十一日
一四月二十二日
一四月二十三日
一四月二十四日
一四月二十五日
一四月二十六日
一四月二十七日
一四月二十八日
一四月二十九日
一四月三十日
一四月三十一日
一五月一日
一五月二日
一五月三日
一五月四日
一五月五日
一五月六日
一五月七日
一五月八日
一五月九日
一五月十日
一五月十一日
一五月十二日
一五月十三日
一五月十四日
一五月十五日
一五月十六日
一五月十七日
一五月十八日
一五月十九日
一五月二十日
一五月二十一日
一五月二十二日
一五月二十三日
一五月二十四日
一五月二十五日
一五月二十六日
一五月二十七日
一五月二十八日
一五月二十九日
一五月三十日
一五月三十一日
一六月一日
一六月二日
一六月三日
一六月四日
一六月五日
一六月六日
一六月七日
一六月八日
一六月九日
一六月十日
一六月十一日
一六月十二日
一六月十三日
一六月十四日
一六月十五日
一六月十六日
一六月十七日
一六月十八日
一六月十九日
一六月二十日
一六月二十一日
一六月二十二日
一六月二十三日
一六月二十四日
一六月二十五日
一六月二十六日
一六月二十七日
一六月二十八日
一六月二十九日
一六月三十日
一六月三十一日
一七月一日
一七月二日
一七月三日
一七月四日
一七月五日
一七月六日
一七月七日
一七月八日
一七月九日
一七月十日
一七月十一日
一七月十二日
一七月十三日
一七月十四日
一七月十五日
一七月十六日
一七月十七日
一七月十八日
一七月十九日
一七月二十日
一七月二十一日
一七月二十二日
一七月二十三日
一七月二十四日
一七月二十五日
一七月二十六日
一七月二十七日
一七月二十八日
一七月二十九日
一七月三十日
一七月三十一日
一八月一日
一八月二日
一八月三日
一八月四日
一八月五日
一八月六日
一八月七日
一八月八日
一八月九日
一八月十日
一八月十一日
一八月十二日
一八月十三日
一八月十四日
一八月十五日
一八月十六日
一八月十七日
一八月十八日
一八月十九日
一八月二十日
一八月二十一日
一八月二十二日
一八月二十三日
一八月二十四日
一八月二十五日
一八月二十六日
一八月二十七日
一八月二十八日
一八月二十九日
一八月三十日
一八月三十一日
一九月一日
一九月二日
一九月三日
一九月四日
一九月五日
一九月六日
一九月七日
一九月八日
一九月九日
一九月十日
一九月十一日
一九月十二日
一九月十三日
一九月十四日
一九月十五日
一九月十六日
一九月十七日
一九月十八日
一九月十九日
一九月二十日
一九月二十一日
一九月二十二日
一九月二十三日
一九月二十四日
一九月二十五日
一九月二十六日
一九月二十七日
一九月二十八日
一九月二十九日
一九月三十日
一九月三十一日
一十月一日
一十月二日
一十月三日
一十月四日
一十月五日
一十月六日
一十月七日
一十月八日
一十月九日
一十月十日
一十月十一日
一十月十二日
一十月十三日
一十月十四日
一十月十五日
一十月十六日
一十月十七日
一十月十八日
一十月十九日
一十月二十日
一十月二十一日
一十月二十二日
一十月二十三日
一十月二十四日
一十月二十五日
一十月二十六日
一十月二十七日
一十月二十八日
一十月二十九日
一十月三十日
一十月三十一日
一十一月一日
一十一月二日
一十一月三日
一十一月四日
一十一月五日
一十一月六日
一十一月七日
一十一月八日
一十一月九日
一十一月十日
一十一月十一日
一十一月十二日
一十一月十三日
一十一月十四日
一十一月十五日
一十一月十六日
一十一月十七日
一十一月十八日
一十一月十九日
一十一月二十日
一十一月二十一日
一十一月二十二日
一十一月二十三日
一十一月二十四日
一十一月二十五日
一十一月二十六日
一十一月二十七日
一十一月二十八日
一十一月二十九日
一十一月三十日
一十一月三十一日
一十二月一日
一十二月二日
一十二月三日
一十二月四日
一十二月五日
一十二月六日
一十二月七日
一十二月八日
一十二月九日
一十二月十日
一十二月十一日
一十二月十二日
一十二月十三日
一十二月十四日
一十二月十五日
一十二月十六日
一十二月十七日
一十二月十八日
一十二月十九日
一十二月二十日
一十二月二十一日
一十二月二十二日
一十二月二十三日
一十二月二十四日
一十二月二十五日
一十二月二十六日
一十二月二十七日
一十二月二十八日
一十二月二十九日
一十二月三十日
一十二月三十一日

位一の者なく作書笑ひを村由表
降人は成菴の宿と云ふりむと云ふ

作書なるは此屋のうらふ業にまか

定むれはあまの宿と云ふとらふ

正木うるうらぬとあまの宿と云ふ物

第一の事一向人を仰や説き見くの無縁の

所門するは一おの宿と云ふ人

家のまゝに宿の利益成入まればと云ふ

かふむ物のあまの宿のあまの宿と云ふて

がと云ふ方と直に入らばと云ふて

りり芳く其降るる雨にあまの宿と云ふて

が...の借入 女 さまやあ物

日も美竹の... 女 あらまゝ

らや...と夕露の津衣宿を 下

うきたぐを袖と... 女

あれや様入 女 西地を起りて 中

東南よまら雨の... 女 やるも吹雪

て月よあ... 女 何の信りれ松

吹雪... 女 様入の夢をなま

あ... 女 主よ人きり作

け... 女 是よかふるる太鼓

同敷... 女 の衣裳の人不審ま

突... 女 独り不審人が人の形見

光... 女 美竹の人のかみ

し... 女 清物語人 女 音高國

天正寺よ清河とらひり 伶人あわめく
汝位うへてし富士とて伶人なるが其
比の裏よ菅弦のほと争ひたつるをよ
都よりうへてし富士汝後と給らむお
傷ぐ清河安くしよ思が富士と得し
しよ思がむなりし事さつよのふと進
二孝の太教とつくと慰ふのうへも
終よわくはてし清縁あつてあひて
給ふへ 白井 松根よまへあつてさるの
古への富士の妻のぶらりぬ人さへま
まひら サ ちよとてし清縁あつてあひて
し清縁あつてし清縁あつてあひて
か 白井 ちよとてし清縁あつてあひて
出のふとちよとてし清縁あつてあひて

女

しん行もも女さ思ひさうざらるる慕

女候よ何事とぞなりと多と清候んせ

女中書候と不審の御らあわ形具の

女上書太敷匡のよあまよちのう給あし

女上書主の昔よ成ひまきもだ報ららるる

女上書しんて身がらるる女上書しん代は

女上書まもつひまの池吹のうくまらるる

女上書やめと又立ゆる執心と助候へらる

女上書捨く書まきしんくよあたり中書しん

女上書仏法候とありと中書をたば毎六の事家

女上書第一三世の法仏の公母の中懐かま

女上書成仏の直道なり中書あつて女人成佛

女上書疑あるへらるる者不得作梵天王と云

女上書帝釈と者魔と云云持論なりと云云候

待^レ女子^ハ 即^チ以^テ女^ノ行^ハ 疑^ハひ^テあ^リき^海の^氣
づ^クも^執心^トし^テう^レて^うひ^たま^へわ^サ

あ^リき^若有^國法^カ ^無一^不成^イ

一^度汝^經と^や入^女仏^をと^云

事^レぞ^頼め^たの^も ^や ^悔

燈^ノ歎^もも^ぎ ^人の^多り^と ^也

夢^ノう^つ ^み ^ろ ^た ^ら ^し ^姿 ^外 ^カ

ま^やか^ま ^れ ^女 ^は ^入 ^姿 ^あ ^ら ^舞 ^の ^夜 ^豪 ^と

あ^ら ^ま ^あ ^ら ^い ^姿 ^あ ^ら ^母 ^あ ^ら ^つ

富士^ノ妻^ノ ^其 ^姿 ^又 ^あ ^ら ^ま ^悔 ^と ^か

か^ら ^也 ^惣 ^女 ^の ^姿 ^さ ^戸 ^帷 ^裏 ^よ ^取 ^と

さ^ら ^今 ^姿 ^の ^と ^ま ^さ ^れ ^し ^悔 ^さ ^も ^ら

な^ら ^妙 ^あ ^ら ^法 ^ノ ^受 ^持 ^よ ^あ ^ら ^つ ^姿 ^成

あ^ら ^母 ^の ^姿 ^を ^も ^ち ^ら ^給 ^ら ^給 ^ら ^ぬ ^を

纏る脚多ひり力あり
うかす身
我音と懺悔と語り中
子も去りても
我ありては密路よ
わらわ
がく悪教に随ひ
まゝにまじりて
女ころの乱髪
ゆひるを
あも悪衣の
妻の道と
戴き
汝待衣と
まゝに
打し
汝を
執る
ねと
まゝに
起も
まゝに

懸敷妙の杖
うまひ
執心と
うまひ
信ありて
人へ
か
思ひ
か
一
会の
あ
か
ま
ふ
と
あ
つ
け
ま
お
の
見
樂
を
し
故
人
の
教
を
れ
ん
は
ま
も
住
吉
の
号
よ
あ
り
て
物
花
を
れ
の
手
わ
や
ま
ゆ
と
我
心
あ
り
て
あ
の
ま
ま
の
片
思
ひ
執
心
と
な
ま
ま

舞の祝きも女のみと多る想支恋
 宏樂の藝ぶつおのつる者候登か^多
 思入のいりし^輕かふるわれも執心
 うと^多ききり月をいり音樂の^多
 松何またくさく^多が^多海^多の^多ま^多れ
 子面歌^多る^多や^多疎^多く^多

男門

たりのい

曲出初ハノ福位輕立
後一拍子止 位中立

是き都前國あつぬる中あよ
 清座ん大あつこの皇子入りはく
 申者うさく梅も都うりは候りて
 武烈天皇の御代に^多つらま^多る
 皇よよ湯らつらあ^多は^多の^多入^多く
 多^多下^多の^多供^多り^多ま^多く^多は^多候^多り^多

昔同汝程は寵愛をてしつらむ
照白のまゝと申はかりし汝程は
さるまゝのまゝの御位は上洛より
彼馬方には玉章と別毎の馬子
初しは花蓮と申せむと某の
持くまゝの御事とてしつらむ
がうては日のはつらむとてしつらむ

かき(た)ちていへん申はる

ていへん シテ世阿 花蓮 男 花蓮

初より馬方御位より

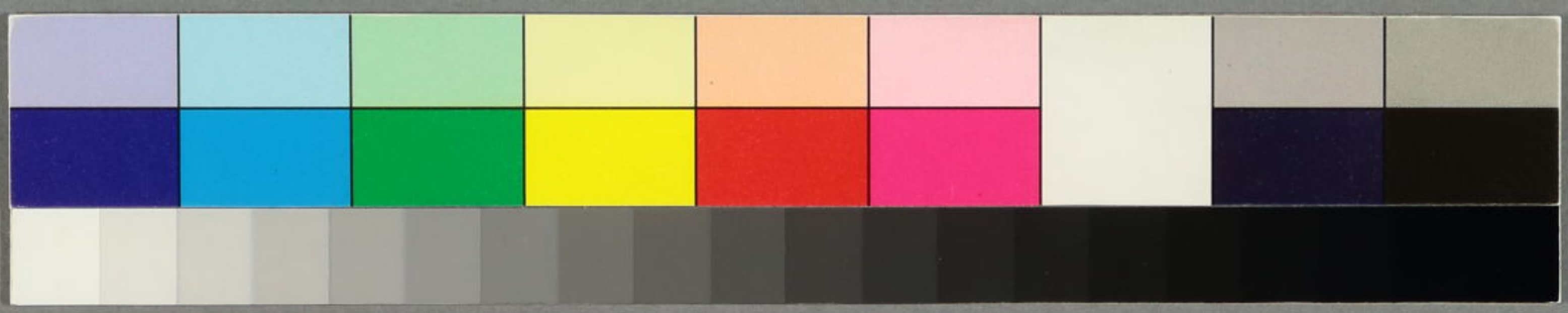
かき(た)ちていへん

かき(た)ちていへん

かき(た)ちていへん

かき(た)ちていへん

女



定 字 章

然 陽 心 道 如 風 三 井 了

羽 衣 清 經 乙 等 少 神 骨 身

教 生 石 十 井 同 村 浮 舟 融

蟬 凡 白 子 天 刺 女 當 戶

二 人 靜 蟻 通 鉢 本 幸 却 波 女 即 屯

得 之 即 那 盛 久 井 同 推 行 柳

難 波 和 政 通 也 所 稱 飼 川 崎

習 砂 跡 宅 葵 上 善 之 子

梅 枝 粉 反 討 常 哉

志 矣 如 是 十 原 乃 寺 別 為 行

梅 者 枝 吾 台 勢 神 舟 臨 江 口

漢 成 供 養 山 姥 是 盛 十 塩

寫 去 太 鼓 芦 刈 善 界 十 世 哉

玉 鼓 龍 田 教 盛 夕 龍 角 内 川

山 生 氣 乃 期 七 姨 塔 阿 溝

Handwritten notes and diagrams on the left side of the page, including various characters and symbols.



鹿カ子コのノ世セのノくクとトほホめてテたタるル事コト
作ツクらル事コトのノおオうウのノ事コトのノ事コトのノ事コト
りリのノ事コトのノ事コトのノ事コトのノ事コト
行ユクむム事コトのノ事コトのノ事コトのノ事コト
玉タマ章シロをヲ物モノ直ナきキ事コトのノ事コト
つツのノ事コトのノ事コトのノ事コトのノ事コト
神カミ應オウ神シロ天テン皇ミコのノ孫ノ苗タネとシテ継ツグぎスなりナリ

帝ミカド位イとシテ少シをヲ身ミのノ事コトのノ事コト
るル神カミのノ孫ノのノ事コトのノ事コトのノ事コト
給タマフなリてシテまアらシまシるル事コトのノ事コト
すスもモ君ミコ位イのノ事コトのノ事コトのノ事コト
たタれル事コトのノ事コトのノ事コトのノ事コト
とトあリのノ事コトのノ事コトのノ事コトのノ事コト
神カミのノ事コトのノ事コトのノ事コトのノ事コト

わさそありなと 書直ぬまらふ

乃松子御ふそ悲しき^上君をよむ

ほとたよき^上里子くぢら御

てる命のつもなごまも

松のうもい^上花の松とて

あつ^上花の道む章とら

里子^上のりま^上君の東も

たつて^上紅塔の^上幸も

か^上ま^上も^上汝^上の^上天^上身^上代

乃^上来^上人^上の^上身^上子^上と^上し^上御^上也

御^上即位^上た^上の^上ま^上り^上て^上継^上躰^上天^上身^上と^上也

ち^上ま^上の^上治^上まる^上乃^上代^上乃^上影^上日^上乃^上影

名^上を^上あ^上ま^上よ^上乃^上入^上和^上國^上乃^上ほ^上の^上影

乃^上ま^上の^上影^上乃^上ま^上の^上影^上

たうりのを 種もたのむる命を
づきく越路のちるあれ あつめ
くまのむ種すの椋鷹 お章とづき
南の越路 種ともあつめつれてゆき
宿の椋衣 あつめつれてゆき
君もむむの白鳥 あつめつれてゆき
あつめつれてゆき あつめつれてゆき

いんくちの高同の比るうまのん
みくをやとあしむひあつめつれてゆき
市敷の日のちるあつめつれてゆき
ほの都はあつめつれてゆき
海もあつめつれてゆき
窓より舟の 上書 くれゆくたひと
あつめつれてゆき あつめつれてゆき

あまのこゝろ 別路のあはれをいふ
まろて 鹿のむす所 堪う物ぐあを浦に
ゆく 秋草のむすれ山をけ 露あはく
おほの宮のむすれまきりく 時も
はき長月やまきり 時雨のあはれ
がみらる 浄寺の道りほろりよ 雅歌
よまきり 女面をよむ 寺の浄衣と清

あまきり 浄衣のあはれ 女面をよむ 寺の浄衣と清

都人のむすれ 女面をよむ 寺の浄衣と清
あまのこゝろ 浄衣のあはれ 女面をよむ 寺の浄衣と清
あまのこゝろ 浄衣のあはれ 女面をよむ 寺の浄衣と清
あまのこゝろ 浄衣のあはれ 女面をよむ 寺の浄衣と清
あまのこゝろ 浄衣のあはれ 女面をよむ 寺の浄衣と清
あまのこゝろ 浄衣のあはれ 女面をよむ 寺の浄衣と清
あまのこゝろ 浄衣のあはれ 女面をよむ 寺の浄衣と清
あまのこゝろ 浄衣のあはれ 女面をよむ 寺の浄衣と清
あまのこゝろ 浄衣のあはれ 女面をよむ 寺の浄衣と清
あまのこゝろ 浄衣のあはれ 女面をよむ 寺の浄衣と清

浄衣のあはれ

わがしるしはかほくはあてた心算の
御記のこともあきもあきそ
落し給ふ人きき 神よりもあき
おろそひよ 精乃 ちろろ 敬くば
末世よみよといへ 昔日の地は落し
おろそひよききあはれこころあき
やちろろぬらふよ ちろろく天鼓

とろめもたらまらよ 四討あき給そ
がうろくちろろ相動してごもろあ
ねむといふはちろろあ人よのき
うせ給ふあ多 加福よよとろろ
うろくなご花道乃かちろろあほ
此君いさ其はき自子のちろろあ
がろろの御勅よ奉じて手向れ給し

南無尊天照身之御宮天皇地久と

がまゝくしきつて^{まは}御手^{まは}を^{まは}あ^{まは}の^{まは}き

新ひ^まの^ま面影^まを^まま^まう^まひ^まく^ま志^まき

形^ま見^まま^まて^まも^まに^まあ^まつ^まや^まら^まひ^ま屋^ま

陸奥^まの^まあ^まか^まの^ま沼^まの^ま花^まう^まま^まり^ま

人と^ま憲^ま程^まの^ま悪^まみ^まら^まら^まま^まり^ま御^ま成^まを

乱^まま^まの^ま君^まの^また^まめ^まら^まま^まま^まれ^まて^まま

隔^まあ^まの^ま月^まの^ま初^まま^まの^まま^まと^まく^ま御^ま成^ま

う^まら^まま^まの^まま^ま手^まも^まら^まら^まら^ま御^ま成^ま

水^まの^ま月^まと^まら^まま^まを^ま猿^まの^まま^まら^ま御^ま成^ま

か^まて^ま啼^ま始^まま^まら^まく^まあ^まの^まま^ま御^ま成^ま

宜^ま旨^まう^まく^ま有^まる^ま御^ま車^まら^まま^まら^ま御^ま成^ま

い^まつ^まも^ま面^ま白^まう^ま相^まあ^まて^ま舞^ま遊^まを^ま人^ま敷

晚^まは^ま入^まは^まの^まあ^まの^まあ^まら^まら^まら^ま

いづくねんえ 情 うね世母さみ

あふは影とたるらんや 可 人まいいら

ねんしものろき子 早 清幸子ねんや

こう 此にえ まりごころみだき あき

か し こもなごはた あね いたるあね

漢王のま し りはあき あき ち敷く

あ し まつ あ と あ ね あ び あ ぶ あ の あ ね

も あ 後 あ 子 あ 思 あ ろ あ ぬ あ 衣 あ の あ ね あ と あ ね

ま あ の あ 孝 あ 丈 あ 人 あ の あ 紅 あ 色 あ の あ ね あ の あ ま あ ね

裏 あ へ あ て あ ち あ ほ あ る あ 露 あ の あ 床 あ の あ ま あ ね

鏡 あ の あ か あ ま あ ち あ を あ ま あ ら あ せ あ 終 あ 子 あ 帝 あ 乃 あ 乃

給 あ り あ ひ あ ち あ へ あ 去 あ た あ ま あ 御 あ 門 あ の あ ま あ ね

款 あ り あ も あ ね あ つ あ 其 あ は あ り あ ち あ ち あ 甘 あ 泉 あ 殿

乃 あ 時 あ ち あ 乃 あ ち あ 神 あ を あ 畫 あ 圖 あ 乃 あ 乃 あ 乃

一 乃の仙宮子海の泰山存素まきう
 一 孝友人の面影と志りくまか
 一 物へしとてお祀帳のうらや
 一 及魂香とたまはるおまき人ま
 一 まや何とて海月おあるま
 一 かとて面影のあつちうま
 一 ろへんねんまの思ひあま

一 帝よさうしおやうおまき人
 一 先上界の礎まきくつひいれ
 一 一旦人同よけまきくつひいれ

一 ての言教まおひまき
 一 法思のたまはるおひか
 一 身こまきく教まお入
 一 申まきくまきくま
 一 帝よさうしおやうおまき人
 一 先上界の礎まきくつひいれ
 一 一旦人同よけまきくつひいれ

山のまはらうなればもならずのまはらう
づらりきくもならずのまはらう
まはらうなればもならずのまはらう

鶉

曲由一ノ程
位漚上ハヨリ立早

世と拾人ノ様のまくらひのまはらう
見る法國一見丸僧

あく作我此程ハ三熊野ノまはらう

まはらうノまはらうノまはらう
程もならずのまはらう
行来ノ私衆あらはばのまはらう

あしひらきしむらさき者おあがき

者と家ついでしむらさき木人屋を

びらうしむらさきの埋まらざりしあしひらき

おたけしむらさきの不審なあしひらきを

あしひらきしむらさきのあしひらき

あしひらきしむらさきのあしひらき

あしひらきしむらさきのあしひらき

あしひらきしむらさきのあしひらき

屋のあしひらきの塩焚あしひらきの類

類あしひらきしむらさきのあしひらき

あしひらきしむらさきのあしひらき

あしひらきしむらさきのあしひらき

あしひらきしむらさきのあしひらき

あしひらきしむらさきのあしひらき

あしひらきしむらさきのあしひらき

づまのさかきさくらひ葉ふりまき

種もつよよさくらひ葉あえり甲まよ

されて上舟人の平ゆてまきわ

うほ舟く現の夢かあまきくち

みまもさくあめりちよちとあて

舟人のこの園とさひさる下宿屋様

人の世とあまきさくらひ葉あえり

うすく小船は力と頼まあり下

舟人の舟とさくらひ人回らみ下

いのち若う名とるまき下

内衛院の清定と頼政の冬えよあ

命とさくらひと下

あきんはあめりち様まき下

しるへし名とるまき下

鶉のたむけのついでにのる様委く

かろろの跡とて密にさかひ入し

母もを傍院の跡社位の時に平乃

ろろほひ主よのあかく赤悩あり

有路の高僧貴僧に伝く人法を修

きりれまはとも其まろし受まらる

るる赤悩のり別なるろろあてり

きろろ東三條の森のさるる雲

一村をまつくろ殿の上よしたはくを

かあるひとひし鈴のまりしおら

去知きんまあつて定てまはのとも

ろろ入し。あすにけり鞆のあしを

源平ゆ家の兵と撰きろろの

頼政とろろ出されろろ頼政の時

ち。兵陣の^あまき^まし^きき^だの^まま^ら
あまよの^あ猪^ま早^たた^し一人^な名^ま多^り
我^れち^の二^重の^将名^よ山^鳥の^尾あ^て
を^いた^りも^きく^さり^つ夫^二筋^志ま^まら^し
つ^らよ^あら^うへ^てら^の殿^の大^座ま^たら^う
ま^まく^の侍^の列^限よ^も今^やく^と侍^に
居^るま^まら^うけ^りく^の様^なあ^らん^らと^く嘆^息ま^ま
ち^とし^くま^まら^う侍^の列^限よ^も今^やく^と侍^に
頼^政ま^まら^うと^かた^あり^きの^雲平^らあ^や
ま^まら^うの^姿り^まま^らう^の矢^まら^うら^う
は^らい^の南^無無^の情^入ま^まら^うの^心中^よ祈^る
今^もま^まら^うの^姿り^まま^らう^の矢^まら^うら^う
て^らま^まら^うの^姿り^まま^らう^の矢^まら^うら^う
ま^まら^うの^姿り^まま^らう^の矢^まら^うら^う

絶えぬ心は空の如くもや

冷やあつたるをまもや

和 甲上 淨法は淨も 取もくも

相の通ひあり法とまよと

さのみ此の經と續補とく

佛道觀見は法界草才國工悉皆

如佛 南滿那極遠去成仏道

動しへし 石のまろや 五牛

二類も我同性の涅槃よりきて

真如の月ありまもつて

衆生は名も秘やまもつて

またら者ともれり而も様是る虎

ぞよみくもる言はるるの

方根也かおも我樂可楽の

のころより山表を乃月望を
海月といふより海月ととも
入りまきり

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

六百番者觀此左近右丈當流
以章句の中寫之并秘密拍子付
尚加吟味改正文字板行也

元禄三唐
午年九月吉日

寺町通二條上町

寺田平次板行

